

月刊 やちまなこ

2014.8.15 発行

No. 201

8 月号

釧路湿原国立公園 塘路湖エコミュージアムセンター（あるこっと）だより

湿原散歩

お盆休みや夏休みで釧路湿原は訪れる人で賑わっている。湖には次々と川下りへ向かうカヌーが見える展望台は広大な景観に感動する人、タンチョウやキタキツネ、エゾシカを探す人、自撮りする人などの姿があり、その上空には時折羽音を立てて飛び交うトンボの群れが見えた。



コッタロ川と湿原のほとりから

170 8月のコッタロ湿原便り

コッタロ在住・中本 アキ子(文) 中本 民三(写真)

残暑御見舞を申し上げます。一方でコッタロは長雨続きに加え大気的不安定な状態が短い夏の寿命をさらに縮めており、立秋を待たずして早々と秋を迎えているのです。たまさか太陽が顔をのぞかせることはあっても、まるで瞬間湯沸し器か線香花火の如く、一瞬の『暑さ』にぬか喜びさせられた後すぐまた雲間にお隠れになって、がっかり！夜は夜でお月様、お星様とも御縁が途切れ、なかなか夏の三角等星座を眺めることもごさいません。明日（11日）未明にお出まし予定の今年最大のスーパームーンを拝むことが出来るでしょうか・・・？

ところで、このような雨天曇天を手離しで喜ぶ水辺の生きもの達がいる、その代表格であるエゾアカガエルは、5月からえんえんと喧しい大合唱の波をわき立たせているではありませんか。池の数と広さをうんと拡張したビオトープ効果抜群で、沢山の昆虫類を増やしたのも自業自得、“夜を徹し、恋を語らうカエル哉”。又、大発生したトンボを飛び乍ら捕食する野鳥等の中でもコサメビタキのトンボ捕りは器用で面白く、サッとくわえて電線に止まった瞬間をパチリ。このところ夏草の殆んどが結実して秋の草花へとバトンタッチしている折も折、花アブを軽く止まらせた巴草のパッと目を惹く黄色が、オイデオイデしているので写してみると、植物と昆虫が対話している風に見えてくるでしょうか？

さて、今年三月迄日参していた川蟬君が、忘れかけていた物をとりに帰ってきた様な感じで再び登場して7月中旬から20日滞在し、その期間可能な限りを観察に費やしましたので報告致します。彼の一日の捕食魚数は15尾でした。雨天晴天を問わず、早朝（恐らく5時前）から夕刻6時頃迄、断続的に、一回の飛来で2尾又は5尾を、本池（水深90cm）に突入して10cm位の仔魚をつかまえると、必殺技で3～4度近くの物に魚をくわえたまま叩きつけてから呑み込むのです。狙った魚は逃さずキャッチする一部始終を飽きることなく見つめておりましたよ。



湿原の住人たち その161

タチギボウシ

今年もタチギボウシが夏の湿原に彩りを添えてくれました。センター周辺では、あまり数は多くないようですが、7～8月にコッタロ湿原への道路沿いや塘路湖岸の日当たりのよい湿地で見られます。高さ1メートルほどの直立した茎に、うつむき加減に並んだ釣り鐘形の薄紫色の花が、下から順に咲きます。山菜として食用にできますが、若芽の頃の姿は、有毒なバイケイソウと似ているので注意が必要です。花も食べられるそうですが、湿原を紫色に染める様子を楽しみに、こちらは訪花昆虫におまかせしています。



湿原の野鳥を展示・バードカービング作品展

バードカービング作品展を今月17日まで、レクチャールームで開催しています。2013年度、



自然ふれあい行事「バードカービング講座」受講者の作品を展示していて、今回は釧路湿原に生息するベニマシコをモデルに作りました。

昨年10月から今年2月まで、5回の講座を通して作品を作り、角材を切出しナイフや彫刻刃を使って削り、頭や胴体、翼、尾等の部分を仕上げたあと足をつけ、彩色といった工程を通して作品を完成させます。講師を務める沢田さんの作品も含め、受講者の個性あふれる作品に来館者も熱心に見ていました。

ネムネムのてうりうろうろ日記 Vol.50「天売島のウミガラス、塘路湖のウミガラス」

3連休があったので、思い切って天売・焼尻島に行ってきました（片道8時間の車の運転より、たった1時間のフェリーのほうが船酔いでキツかった・・・）。道東の湿原に慣れた私にとって、道北かつ島という環境は異世界です。図鑑でしかみたことのない海鳥や植物を実際に目にして、学生の頃のような新鮮な気持ちでフィールドを堪能しました。

さて旅行から帰ってくると夏の大仕事、標本の防虫作業が待っていました。標本に防虫剤を補充していると、郷土館にもウミガラスのはく製が保管されていることに気づきました。「1960年に塘路湖で採取」という情報のみの古い標本ですが、天売島に行くまで気にもとめませんでした。

現在、北方領土を除けば、国内のウミガラスの繁殖地は天売島に限られています。しかし1960年代であれば、根室のモユルリ島の繁殖地がまだあった頃。まさかこのウミガラス、根室生まれでは？と想像してしまいます。採取された月日が記載されていないので、憶測の域を出ないのですが、ウミガラスが塘路湖にいた事実には驚きました。

辻 ねむ (標茶町郷土館学芸員)

7がつ 22にち

ばしょ てうりとう



ウミガラスの繁殖地、赤岩。ヒナは巣立つとき、高さ25mもある断崖絶壁から海に飛び降りるのだそうです。世間に出て文字通り、荒波にもまれるのね。

